

陶邑窯跡群の終焉・解体からみる須恵器生産供給体制の変化

1 はじめに

本稿では、陶邑窯最終段階の窯（9世紀前半）である高蔵寺（TK）230-I号窯出土須恵器を例に挙げ、その生産内容と供給先について検討する。それにより、8世紀から9世紀にかけての須恵器供給体制がどのように変化していったのかを、生産址出土資料と都城出土資料を比較することで、あきらかにしていきたい。

2 TK230-I号窯出土土器の位置づけ

TK230-I号窯は、瓷器形の椀・皿類が生産されている点、壺Mはヘラ切り輪高台と糸切り平高台の両方がみられる点等から、9世紀前半（～9世紀中頃）に操業された窯と考えられる。TK230-I号窯では、壺・甕類の占める比率が高く、奈良時代の供膳具を中心とした組成とは大きく異なる（図84）。

鉢のプロポーションおよび口縁部形態等は、陶邑窯と播磨地域で生産されたものに類似性がみられ、平安京近郊窯の製品とは異なる点は興味深い（木村2010・2012）。また、壺・甕類に関しても、陶邑窯と播磨諸窯の類似性がみられる¹⁾。

平安京などでは須恵器の供膳具類（杯・椀・皿）は僅少で、供膳具自体が緑釉・灰釉陶器の供膳具にとってかわられる。よって、TK230-I号窯で生産された供膳具類は、陶邑窯周辺の消費地に供給されたものと考えられる。一方で、甕は都城向けに生産していたと考えられる。甕の都城への供給例については、3で紹介したい。

3 都城における須恵器大甕の様相

TK230-I号窯でみられるような「垂下状口縁」をもつ甕は、現状では陶邑窯以外でほとんどみられず、陶邑窯に特有のものといえる。陶邑窯では、垂下状口縁をもつ須恵器大甕が奈良時代後半以降に出現し、9世紀中頃に至るまで生産され続ける。都城でも奈良時代後半以降に垂下状口縁をもつ陶邑産大甕が目立つようになる（図85）。

以下では、都城における陶邑産須恵器大甕の出土事例

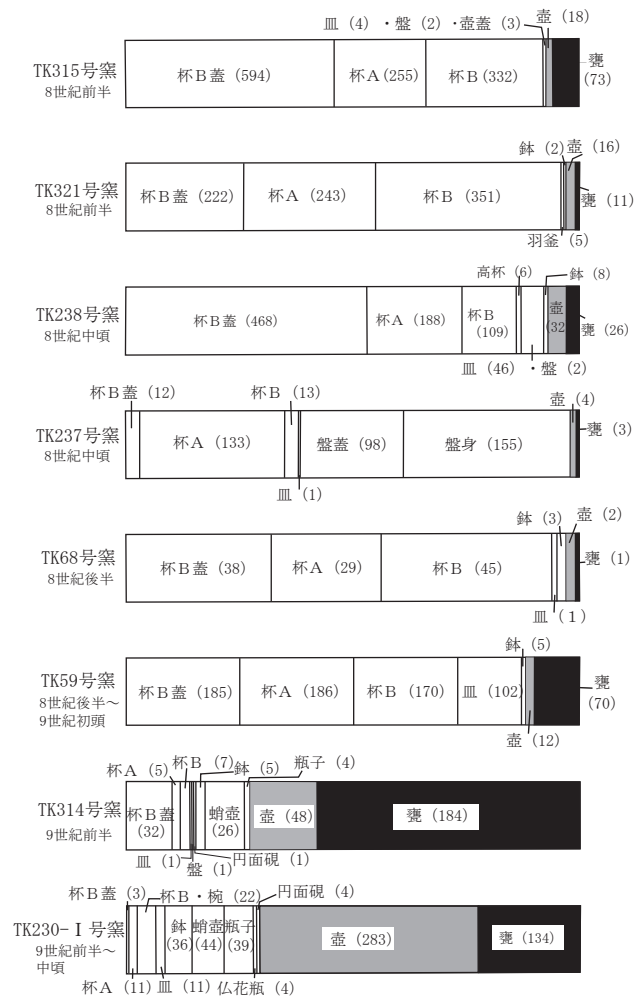


図84 器種組成に占める甕の割合の時期別変遷

を数例紹介する。

平城京左京三条一坊七坪SK5769 奈良時代後半の土坑SK5769に、南方のSB5763に据えてあったと考えられる陶邑産須恵器大甕が廃棄されていた。

西大寺食堂院SX930 東西4基の埋甕列を、南北方向に4列検出しており、既調査の成果とあわせると、甕は少なくとも20列、総数80基が並んでいたと推定される。甕自体は8世紀後半から9世紀代の所産と考えられる。

長岡京右京八条二坊七町SD90 甕据付穴をもつ長岡京期の建物の東側にある溝から、垂下状口縁をもつ陶邑産須恵器大甕が出土した。酒造りに使用した大甕が廃棄されたとされる²⁾。

平安京右京三条三坊三町SX07 9世紀中頃～後半の湿地状の落ち込みから陶邑産須恵器大甕が出土している。

以上は代表的な例であり、大甕は完形に復せることが少ないが、破片の出土をみても、多くの遺跡で垂下状口縁をもつ甕の出土が確認できる。このような大甕は酒造り等の用途で使用されていたと考えられる（玉田2002）。

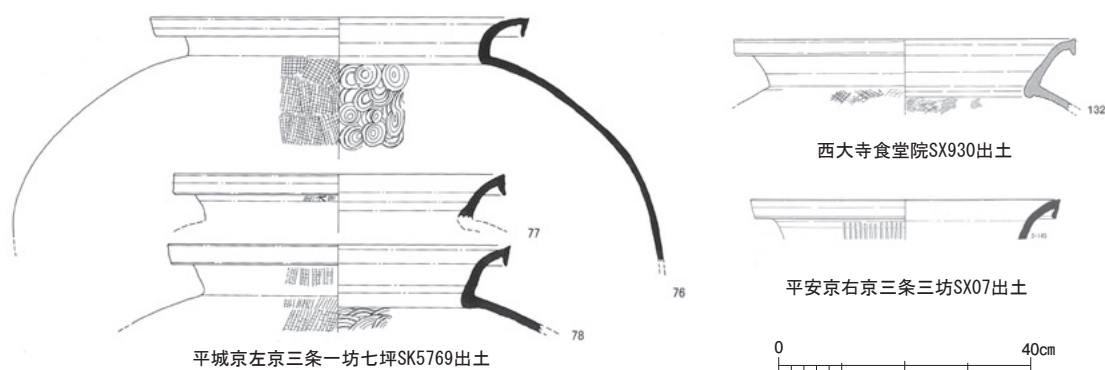


図85 都城出土の陶邑窯産須恵器大甕 1:12

4 須恵器供給体制の再編

先述したように、TK230-I号窯における壺・甕類の比率の高さは、奈良時代的な供膳具中心の生産の有り様とは一線を画するものであると評価できる。陶邑窯では、TK230-I号窯以外の窯においても、貯蔵具の占める割合が増すことから、貯蔵具生産に重点を置くという生産のあり方は、陶邑窯全体の傾向といえる。このような変化は、都城における陶邑産須恵器の様相と一致しており、陶邑窯が最終段階まで、都城への供給を意識した生産をおこなっていたと考えることができる。

中世後半である14世紀以降に桶の普及が進むようになるまで、須恵器の大甕は、大量の液体等を貯蔵するほぼ唯一の容器であり、手工業生産の基本的な用具であったと考えられる。よって、奈良時代後半以降に都市内部での生産活動が活発になるにつれ、須恵器甕の需要も拡大していったと考えられる。このような消費者側の需要が陶邑窯における須恵器生産の生産内容を大きく変化させ、生産器種における甕の比率を高めたと考えられる。経済発展が既存の須恵器供給体制を変化させたと理解することができる。

以上から、奈良時代後半以降、須恵器生産においては、中世的な須恵器生産とされる「単器種大量生産」(宇野1984)の方向性がみられるようになって評価してよいだろう。

陶邑窯は9世紀後半には生産の終焉を迎えることから、それ以降、須恵器甕を都城域へ供給する窯の有力候補としては、西は播磨・備前・讃岐、東は尾張・美濃などの地域が挙げられる。9世紀後半以降、都城への須恵器供給体制は、それまでの陶邑窯を中心とする生産供給のあり方から、瀬戸内沿岸地域と東海地域の二大窯業生産地が中心の生産供給体制へと移行していくとみられる。

5 おわりに—今後の課題—

TK230-I号窯出土資料を中心とした分析により、古代における陶邑窯で生産した器種の変遷をあきらかにすることができた。また、都城出土の須恵器甕に着目した検討からは、陶邑窯跡群の須恵器生産の変遷を都城との関係性から読み取る手がかりを得ることができた。今後も、こうした視点から古代の窯業生産体制の解明を目指していきたい。

(木村理恵/枚方市文化財研究調査会)

付記

本稿は、2010年度、2011年度の高梨学術奨励基金による研究成果の一部である。

註

- 1) 平安時代後期以降の「東播系」須恵器甕の口縁部形態は全て、陶邑窯の最終段階の窯であるTK230-I号窯で確認でき、その点は興味深い。また、9世紀後半以降の東播磨・神出地域における甕生産に、「東播系」の須恵器生産の萌芽がみられ、陶邑窯から播磨地域へと近畿地方における須恵器生産の拠点が移ると評価できる。この事象の背景については、技術系譜を想定できるかも含め、今後検討を深めていきたい。
- 2) 長岡京市埋蔵文化財センター・木村泰彦氏に実見の機会をいただいた。

引用・参考文献

- 宇野隆夫「後半期の須恵器」『史林』第67巻第6号、史学研究会、1984。
- 木村理恵「須恵器大甕からみる古代の窯業生産—近畿地方を中心に—」『古代窯業の基礎研究—須恵器の技術と系譜—』窯跡研究会、2010。
- 木村理恵「壺・鉢からみる篠窯の須恵器の生産と供給」『篠窯跡群大谷3号窯の研究』大阪大学文学研究科、2012。
- 京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京三条三坊』1990。
- 小森俊寛「出土遺物から見た都城と他地域の交流」『古代交通研究』第6号、古代交通研究会、1997。
- 玉田芳英「平城宮の酒造り」『文化財論叢Ⅲ』2002。
- 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993。
- 奈良文化財研究所『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』2007。

図版出典

図1 筆者作図。

図2 参考文献4)、7)、8)より転載(一部改変)。